教育コラム「愛のかけはし」：２４２号

令和４年　１月
江差町教育委員会
学校教育課

『入試に思う 』

今月１５日（土）・１６日（日）に、「大学入学共通テスト」が行われます。このテスト、英語は４技能（読む、聞く、話す、書く）の評価を目的に外部検定試験の活用を。また、思考力・判断力・表現力の的確な評価を目的に記述式問題の導入が検討されました。様々な議論を経て、結果、実施上課題が大きいということで見送られたという経緯があります。とりわけ記述式問題に関しては、早々にその対策に取り組んだ高校や予備校がかなりあったような記憶がおぼろげながらあります。当該の受験生にとっては、制度改革に振り回された感覚は少なからずあったのではと推測します。もし、私が当事者であったなら、おのれの実力を棚に上げ、「まいるよな」と、一言くらいぼやいていたのではないかと思います。

とにもかくにも、当日の天候が穏やかであることを願っています。「北国のハンディー」とよく言われます。４月入学から逆算すると、１月中旬の実施はやむを得ないとは考えますが、北国の受験生にとっては、真冬の嵐に見舞われることもたびたびあり、精神的な負担は大きいです。全国どの受験生も、遅刻しないようかなりの早起きをするわけですが、加えて、風雪による交通機関や道路の状況も想定した行動が求められるからです。今回も、約５０万人が受験するそうです。新型コロナウイルスやインフルエンザに感染することなく、良いコンディションで臨み、培った力が発揮できることを願っています。

さて、昔話になりますが、私の大学受験の時は、国立大は一期校、二期校に分かれていました。どちらも受験することができました。２回チャンスがあったということです。どちらかというと一期校には旧帝大が集まりいわゆる難関校が多く、二期校は滑り止め的なイメージも多少はありました。したがって、二期校の学生の中には、何がしかの劣等感を抱く者もいたそうです。ですが、このイメージは、あくまで一部の状況に基づいたものであり、二期校にも、難関校や有名校はたくさんありました。ちなみに、私は、最終的には、教師になるため、かつおのれの実力と家の経済状況から地元の教員養成大学（二期校です。自転車で通えました）のみを受験しました。

この大学、偏差値もさほど高くはなかったので、「まあ何とかなるだろう」という楽観的な気持ちがあったのは確かでした（受験勉強をおろそかにしたわけではありませんが、やり方はまずかったと反省しています）。しかし、世の常といいますか、「甘い考えや見通し」だけですと、大変厳しい現実を突きつけられるものです。当日は、どの科目も、手ごたえを感じませんでした。試験が終わった後は、「落ちるかも」と不安だけが残りました。結果は、ほぼ惨敗。何とか第３志望で合格できたことは、地獄に仏でした。私の場合、二期校コンプレックスではなく、第３志望（好きでも得意でもない全くの畑違いの分野）コンプレックスを４年間抱くことになりました。

振り返りますと、この当時（否、もっと前からかもしれませんが）から、入試というものは「情報戦」であったのです。私は、自己流の準備で何とかなるだろうという考えで、いわゆる“赤本”（過去の入試問題集）にも取り組むことはありませんでした。「落ちることはないだろう」と高をくくり、受験する大学を甘く見ていました。今から思いますと何と無防備なことをしてしまったかと後悔しています。「傾向と対策」を抜かりなく取り組むことが、本当に大事だと反省しています。

ある受験生Ａの言葉です。Ａは、ある私立大学の法学部を受験し見事合格しました。Ａは、その準備として、志望校の“赤本”の問題を何度も解き、出題の傾向を分析したそうです。そこで、

その大学の法学部の試験の中でも「英語」に際立った傾向があることを掴みました（他からの情報もあったかもしれません）。この傾向の具体は忘れましたが、出題文に使われる単語に何がしかのこだわりのようなもの（確か特別な分野で使われる用語だったかと・・）があることに気づきました。そして、Ａは、徹底的に予想される英単語を洗い出し習得したとのこと。結果、その対策は見事に功を奏したそうです。私は、その話を聞いて、有益な情報を得、それを活用し、最大限の備えをすることの重要さを学びました。

「情報戦」からはそれますが、ある受験生Ｂの言葉です。Ｂは、理系の大学を志望しており、受験科目に「物理」は必須でした。しかし、Ｂの「物理」の成績は低迷していました。足を引っ張る科目だったのです。Ｂは、部活動の区切りがついてから予備校に通うことになりました。まもなく、「あの先生の講義はいい！物理が面白くなった。もっと早くに出会っていれば・・」と。その後、「物理」は、Ｂにとっては、得点源になるまでの科目になりました。私は、この話を聞いて、受験勉強も悪くないなと思いました。「学びの楽しさ」に気づけたからです。また、教育とは人によるものだなとも改めて感じました。

次に高校入試にふれます。今回から、北海道の公立高校の入試の仕方にけっこうな変更があったことを新聞で知りました。昨年度までは、５教科（国、数、英、社、理）各６０点満点で、国・数・英については、学校裁量問題（これがめちゃくくちゃ難しい・・）も取り入れることができましたが、今回から各教科１００点満点になり、学校裁量問題は廃止になりました。試験時間も４５分から５０分になるそうです。

ここでまた昔話です。各教科１００点満点は、私の高校受験時と同じです。ちなみに、当時、受験教科を５教科から３教科（国、数、英）に変更することが検討されていたようですが、結局は５教科のまま今に至っています。いつから６０点満点になったのかは定かではありませんが、私が中学校に勤務していた頃（昭和６０年代あたり）は、すでに６０点満点でした。「何と中途半端な点数だな」と思いその事情を同僚に訊いたところ「今の高校入試は、内申点を重視しています。よって学力検査点ではあまり差がつかないようになっています。普段の頑張りが重視されます」との回答。私、その中学校は、中２の担任からスタートしそのまま持ち上がったので、２年目には内申書作成に携わりました。ちなみに「内申点」の計算方法ですが、１・２年生時は、９教科の評定（５段階）の和を２倍に、３年生時は３倍とします。従って、もし３年間全ての教科で「５」を取りますと、９０＋９０＋１３５で３１５点になります。

当時、家庭科担当の先生（とても明るく元気な方でした）が、生徒たちに「家庭科の５と受験教科の５は同じ重みがあるからね」と堂々と話されていました。受験教科じゃない教科も、内申点では同じ扱いになるのだから手抜きはしないようにという意図であったと想像します。人によっては、これは脅しになるかもしれません。内申点をちらつかせて授業態度の向上を図るわけですから。でも、この先生の授業は魅力的でしたし、またその人柄はどの生徒にも慕われていました。加えて毅然とした姿勢も持っていましたので、生徒も姑息な脅しなどとは微塵も思っていませんでした。「たいした人だなあ」と私は心から感心しておりました。

今回の高校入試制度の変更理由は、新学習指導要領が重視している「思考力・判断力・表現力」を評価するためだそうです。基礎的な内容と「思考力・判断力・表現力」などを問う高難度の内容をバランスよく組み合わせた試験問題になるようです。当日の学力検査点が３００点満点から５００点満点となります。合否の在り方（学力検査点と内申点の扱い）がどうなるかは定かではありませんが、全ての受験生が、試験問題において、身に付けた知識や技能を活用して解決する力が問われることになります。入試で、そのような力が問われるということは、学校現場の授業において、そのような力を育成することが、当然求められることになります。入試が目的ではありませんが、今、学校では新学習指導要領に基づき、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めています。その延長線上の節目として入試があると思っています。